仲間と共に音楽を創り出す歓び

ヴァイオリニスト 前田（まえだ） 妃奈（ひな）さん

ポーランドで開催された若手ヴァイオリン奏者の世界的登竜門「第16回ヘンリク・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクール」（2022年10月）で優勝し、国際的に注目を集める前田妃奈さん（東京音楽大学在学）。同コンクールで日本人が優勝するのは実に41年ぶりの快挙で、その後、前田さんは１年間におよぶ優勝者（世界）ツアーをやり遂げた。現地での体験や今の思いなどを伺った。

前田妃奈：2002年大阪府生まれ。東京音楽大学付属高校を経て、現在、同大学音楽学部器楽専攻（ヴァイオリン）特別特待奨学生として在学。これまでに井上敦子、前田悦代、現在、小栗まち絵、原田幸一郎、神尾真由子の各氏に師事。

41年ぶりの快挙

ヘンリク・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールは、ショパンとならぶ19世紀を代表するヴァイオリニストで作曲家のヘンリク・ヴィエニャフスキ（ポーランド）の生誕100年を記念して、1935年にワルシャワで始まった。第二次世界大戦後は開催地を同国ポズナンに移し、以来原則５年ごとに開催されている。優れた若手演奏家の発掘を目的としており、エリザベート王妃国際音楽コンクールやチャイコフスキー国際コンクールなどとともに、世界的権威のあるコンクールといわれている。

第16回は2021年開催の予定であったが、コロナ禍による延期で2022年10月に行われた。世界各国から200名以上がエントリーし、前田さんを含む６名がファイナルステージに進出。前田さんは、ウカシュ・ボロヴィチ指揮、ポズナン・フィルハーモニー管弦楽団との共演で、ヴィエニャフスキのヴァイオリン協奏曲第２番ニ短調作品22とブラームスのヴァイオリン協奏曲ニ長調作品77を演奏し、圧巻の技術と表現力で見事第１位に輝いた。さらに「ヴィエニャフスキ コンチェルト賞」「カプリス賞」「ソナタ賞」「ベートーヴェン、ブラームス作品賞」も受賞した。

同コンクールで日本人が頂点に立つのは、1981年（第８回）以来41年ぶり。この快挙は世界中に発信され、前田さんは2022年10月から翌2023年12月まで、優勝者の副賞である世界ツアーを行った。

一人で臨んだ世界ツアー

世界ツアーはヨーロッパや南米など約20か国60地域におよんだ。新型コロナウイルスの緊急事態宣言下にあった2021年８月、住友生命いずみホール（大阪）で予定していた関西フィルハーモニー管弦楽団との共演が前日に中止され大泣きした前田さん（当時高校生）は、その２年後、たった一人で世界を駆け巡っていたのだった。

「ステージ衣装など自分の背丈ほどの荷物を抱えていますから、飛行機や鉄道での移動が大変。南米では英語が通じないし、そもそも私の英語はカタコトだし…。でも、演奏会の予定が現地の日本人会や大使館で話題になっていて、その方々に案内していただいたおかげで助かりました。パナマではジャングルツアー、エジプトではピラミッドも見物しましたよ」と微笑む。小学生のときから進んで学級委員を務めるなど、持ち前の行動力と物怖じしない性格でやり遂げた世界ツアーだった。

行く先々でメディアの取材も多く受けた。パナマでは国の要人のような扱いを受け、現地の政府関係者やパナマ駐在のポーランド大使らと一緒に記者会見にも臨んだ。そうして広く知られたこともあって、前田さんが登場しただけで「ブラーヴァ！」と声がかかった。共演者たちからも温かい歓迎を受け、「いろんな国のアイデンティティの異なる人たちと一緒に演奏すると、同じ曲でも全然違ってくる。そうしてさまざまなインスピレーションを得るのはとても楽しかった」と目を細める。

ギザにて
（2023年10月上旬／エジプト）

カイロオペラハウスにて
（2023年10月上旬／エジプト）

スロヴェニア・タルティーニハウスにて
（2023年11月中旬／スロヴェニア共和国）

（写真提供：前田妃奈さん）

11歳からソリスト

前田さんがヴァイオリンを始めたのは４歳のとき。テレビの幼児番組で人形が弾いているのを見て「自分もやりたい」と言い出したのがきっかけだった。ヤマハ音楽教室を経て８歳から15歳まで相愛大学附属音楽教室、相愛ジュニアオーケストラに在籍し、11歳になるとソリストとして関西フィルハーモニー管弦楽団や東京交響楽団などとも共演。第67回全日本学生音楽コンクール全国大会小学校の部第１位（2013年）をはじめ、霧島国際音楽祭賞（2016年、2018年）、第18回東京音楽コンクール弦楽部門第１位（2020年）など数々の受賞歴を持つ。

中学３年生のときには、兵庫県立芸術文化センター「佐渡裕＆スーパーキッズオーケストラ（SKO）」でコンサートミストレス（コンミス）に抜擢された。SKOは、厳しいオーディションで選ばれた小学生から高校生までの弦楽器オーケストラ。コンミスはいわばそのリーダーで、指揮者の音楽観を理解して楽団メンバーに演奏上の注意点を細かく指示したり、本番に向けてモチベーションを高めたりして練習を牽引する役目を担う。前田さんは「年上の人に指示したりアドバイスしたりしてまとめていくのは大変なプレッシャーだったが、メンバーはみんな優しいのでやっていけた」と振り返る。

さまざまな出会いを糧に

世界ツアーに向けて出発するとき、学友たちから「頑張ってきてね」ではなく、「とにかく生きて帰ってきてくれればそれでいい」といわれたのがとても嬉しかったという。コロナパンデミックが去ったとはいえ、感染の危険性は常にある。人生初の世界ツアーに挑む前田さんにとって、演奏家である前に、生身の人間として気遣ってくれる友人の存在が何よりの励ましになった。

「ヴァイオリンをやっていて良かったと思うのは、

（©s.yamamoto）

関西フィルハーモニー管弦楽団 第333回定期演奏会（2022年11月10日／ザ・シンフォニーホール）にて。同楽団音楽監督のオーギュスタン・デュメイ氏が急病のため、急遽代役でソリストを務めた。この演奏で「令和４年度大阪文化祭奨励賞」を受賞。

ヘンリク・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールで１位になったことと、多くの先生方や友だちなど素晴らしい人たちに出会えたこと。そんな人たちのように、私と出会って良かった、私といたら笑顔になれる、と思ってもらえるような人になりたい」

前田さんは今、恩師や友だち、共演者たちとの出会いや交流を糧に、仲間と共に切磋琢磨しながら素晴らしい演奏をすることに大きな喜びや魅力を感じている。

（ライター 三上祥弘）

（©Leszek Zadoš）

第16回ヘンリク・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクール（2022年10月／ポーランド）での受賞風景